様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５４２０６６５

研究課題名（和文）南イタリアのルネサンス建築に見られる中世的要素

研究課題名（英文）Medieval Presence in the Renaissance Architecture in the South Italy

研究代表者
飛ケ谷　潤一郎（Higaya, Junichiro）

東北大学・工学（系）研究科（研究院）・准教授

研究者番号：３０５０２７４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究により南イタリアのルネサンス建築には、建築家の個性よりも、建築主の意向や地元中世の伝統のほうが色濃く反映されていることが判明した。ただし、南イタリアの建築主ないしは建築家が、フィレンツェやローマのルネサンス建築を直接手本としたのか、あるいは建築書を通じて知識が広まっていたのかについては今後の課題としたい。なぜなら、南イタリアの建築には、当時南イタリアを支配していたスペインとの関係についても考慮しなければならないからであるが、両者のあいだの文化交流については、一方的というよりも相互的なものであったと推測できる。

研究成果の概要（英文）：This research revealed that architectural patron’s wishes and local traditions of medieval building more than architect’s individuality decided the Renaissance architecture of South Italy. It is however difficult to conclude that the patrons or architects referred to the Renaissance architecture in Florence or Rome, or they acquired some knowledge of all’antica style by way of architectural treatises, because it is necessary to consider the relationship between South Italy and Spain. Although the latter dominated the former at that time, cultural exchange between two regions is to be observed.

研究分野：建築学

キーワード：南イタリア　ルネサンス建築　中世

１．研究開始当初の背景

15 世紀初期にフィレンツェで発生したルネサンス建築は、15 世紀末期には北イタリアのミラノやヴェネツィア、そして南イタリアではナポリにまで伝播されてゆく。北イタリアにおける初期ルネサンス建築には地元の中世建築の影響が強く感じられ、このことは南イタリアの場合にも当てはまると思われるが、南イタリアのルネサンス建築に関する研究は少なく、地元の中世建築との関連性が指摘されたとしても有名な例のみに限られている。なお、南イタリアの中世建築は実にヴァラエティ豊かであり、ナポリではゴシック、サレルノ（ナポリ近郊）ではイスラーム、プーリア地方ではロマネスクといったように、各地の伝統が根強く残されているのが特徴である。

本研究の対象となる南イタリアのルネサンス建築は、フィレンツェやローマに見られる巨匠の名作とは異なり、設計者についてはほとんど無名の工匠というレヴェルであり、見た目の印象についても洗練されていないもののほうが多い。首都と地方との差、あるいは巨匠と追随者との差という価値観にしたがって判断するならばそれまでだけれども、ローマなどでは秀作が多いがゆえに、都市景観において単体の建築がなす役割という点では、名作といえどもあまり目立たなくなってしまうこともある。ところが地方の小都市になると、新しい建築はたとえあまり洗練されていなくても、希少価値という点で都市景観には欠かせぬ要素となっており、少なくとも地元の人びとからは一級の作品と評価され親しまれている。

２．研究の目的

南イタリアのルネサンス建築が傍流に属することは確かであるが、同地の古代・中世建築の質と量に関しては目を見張るものがある。というのも、南イタリアは太古から近世にいたるまで多くの民族に支配されてきた歴史をもち、とりわけ中世にはアラブ、ノルマン、ホーエンシュタウフェン（ドイツ）、アンジュー（フランス）、アラゴン（スペイン）といった目まぐるしい支配者の交代によって、さまざまな様式が登場するにいたったからである。すなわち、南イタリアのルネサンス建築は、ゴシック建築からの変遷という西洋建築史の本流には当てはまらないがゆえに、特殊な事例として処理されてしまいがちなのである。実際に海外における先行研究について見ると、ナポリは例外としても、地元の研究者による個別の事例研究は進んではいるものの、南イタリアの全体像が提示されるまでにはいたっていない。そこで本研究では、ルネサンス以前の古代・中世から重層する諸外国の様式を分析しながら、南イタリアに共通する何らかの特徴を提示してみたいと思う。

なお、ルネサンスやバロックといった近世建築を中世建築との関係から広く再検討した試みとしては、シモンチーニ編の論文集 *La tradizione medievale nell'architettura italiana dal XV al XVIII secolo*, ed. G. Simoncini, Firenze, 1992 と *Presenze medievali nell'architettura di età moderna e contemporanea*, ed. G. Simoncini, Milano, 1997 があげられる程度であり、イタリア各地の代表例が紹介されたにとどまっているので、課題となる点はまだ多く残されている。

３．研究の方法

本研究では、ナポリを中心とした南イタリアのルネサンス建築（おおよそ 1450～1550 年）を、地元の中世建築との関係から考察する。南イタリアの 15 世紀建築には主にフィレンツェの影響、そして 16 世紀建築には主にローマの影響がしばしば強調されるが、とりわけナポリでは当時から古代建築のみならず、古代建築と誤解されていた中世建築もよく知られていたので、地元の伝統の影響を無視することは難しいように思われる。本研究は新しいアプローチで行う研究と位置づけられ、平面や立・断面の形態のみならず、建設材料や壁面構築技術、そして窓枠や柱頭などの装飾ディテールにいたるまで、ルネサンス建築に見られる中世的要素を検討することを試みる。

研究の計画と方法については、毎年 1 回ひとつの地方につき 2 週間程度の現地調査を行う。現地では建築の写真撮影や図書館・美術館での図面や絵画史料、文献史料などの収集作業につとめ、調査後にはそれらを整理・読解する作業が中心となる。すでに 2010～12 年に鹿島学術振興財団から研究助成を得て、本研究と同じく「南イタリアのルネサンス建築に見られる中世的要素」と題する 2 年間の研究で、ナポリを中心としたカンパーニア地方と、バーリを中心としたプーリア地方を対象に調査を実施した。そこで、本研究の年次計画として、1 年目にカラーブリア地方とバシリカータ地方、2 年目にシチリア島、そして最後の 3 年目にサルデーニャ島を対象範囲としたルネサンス建築を現地調査し、それらの成果をまとめる予定である。ビルディングタイプという点では、おもにキリスト教の聖堂建築を対象とする。パラッツォなどの住宅建築については平面形態などが後世に改変されてしまったものが多いので、考察の対象としては中庭を含めた外部立面と、それらの構成要素である柱や開口部などのディテールに限定される。いずれの場合にも、中世の要素を抽出しながら、それを決定した建築家と依頼主との関係を考察してみたい。

４．研究成果

前述のカンパーニア地方とプーリア地方に関する研究では、2011 年の東日本大震災によって研究室が被災したため、調査対象を少数に限定せざるを得なかったものの、これら

の地方のルネサンス建築には、建築家の個性よりも、建築主の意向や地元中世の伝統のほうが色濃く反映されていることが判明した。本研究が対象とする他の南イタリアの地方についても、おおむね同様の特徴を見出すことができたので、以下ではその二点を中心に説明してゆきたい。ただし、南イタリアの建築家や建築主が、フィレンツェやローマのルネサンス建築を直接手本としたのか、あるいは建築書を通じて知識が広まっていたのかについては今後の課題とし、おもにスペインとの関係から展望を述べるにとどめておきたい。

（1）建築主の意向

①イオニア式戸口の持送り

15 世紀末のナポリに建てられたパラッツォ・カラーファに、当時のナポリではもっぱら宗教建築に用いられていた矩形の戸口が採用された理由は何か。このパラッツォでは確かにアルベルティ設計のパラッツォ・ルチェッライのような矩形のイオニア式戸口が用いられてはいるものの、前者では渦巻持送りが枠内に壁と水平に用いられている点が大きく異なっている（図 1）。このような手法は、ゴシック建築の戸口の持送りにしばしば見受けられる。このパラッツォの近くには、カラーファ家歴代の墓所であるサン・ドメニコ・マッジョーレ聖堂があり、そのアプス左側の戸口を見ると、枠内の上部隅に一対の渦巻持送りが設けられている。この戸口の建設年代は 15 世紀半ばであり、アルベルティのナポリ滞在以前からカラーファ家にはなじみのあるものであった。また、この戸口の上部に彫像が設けられている点を勘案しても、パラッツォ・カラーファの戸口の手本となった可能性は十分に考えられる。

図 1　イオニア式戸口、パラッツォ・カラーファ、ナポリ

②オーダーの積み重ね

ノーラのパラッツォ・コヴォーニのファサードは二層構成であり、オーダーの積み重ねが用いられている（図 2）。ただし、南イタリアのルネサンスのパラッツォには三層構成のファサードはあまり見られず、このパラッツォの第一層と第二層のオーダーはいずれもコリント式である。ナポリとその周辺の町のパラッツォに、アルベルティのパラッツォ・ルチェッライの影響を見出すことは可能である。しかしながら、アルベルティがコロッセウムなどの劇場施設からオーダーの積み重ねを引用したからといって、南イタリアの建築家が同様にサンタ・マリア・カプア・ヴェテレやポッツォーリの円形闘技場からオーダーの積み重ねを引用したとは考えがたい。さらに注目すべき点は、ペペリーノでできた灰色の柱はスタッコで仕上げられた壁とはコントラストを成していることである。この場合は、むしろフランチェスコ・ディ・ジョルジョが設計したコルトーナのサンタ・マリア・カルチナイオ聖堂などのルネサンス建築を手本とした可能性が高いように思われる。

図 2　オーダーの積み重ね、パラッツォ・コヴォーニ、ノーラ

（2）地元中世の伝統

①三角破風上の波形装飾

1529 年に着工されたこのアックアヴィーヴァ・デッレ・フォンティ大聖堂のファサードには、15 世紀の初期ルネサンス、中世のゴシックやロマネスクの特徴が見られる（図 3）。さらに興味深い点は、三角破風の上部に連続して設けられた波形装飾である。波形装飾はギリシアやローマの古典建築においては、一般にフリーズなどの水平の帯飾りとして用いられる。ルネサンス建築の場合は、16 世紀ローマのパラッツォでは階層を区分する水平の帯飾りとして用いられることが多い。しかし、古代神殿の三角破風に関しては、切妻屋根に用いられるにせよ、開口部の上部装飾として用いられるにせよ、破風の頂上と底部との合計 3 個所に彫像やアクロテリオンが設けられる程度が一般的である。一方、ゴシック建築の三角破風について見ると、勾配はかなり急になるが、拳鼻と呼ばれる装飾が破風の全体にわたって連続的に設けられることは少なくない。この大聖堂ファサードの三角破風の勾配は、古代神殿のそれのように緩い

勾配となっているが、この三角破風上部の装飾がファサード中央のバラ窓と合わせて用いられることによって、ゴシック建築のような印象を与えているようにも思われる。

図 3　アックアヴィーヴァ・デッレ・フォンティ大聖堂

②スクインチによるドーム

シチリア南東部のヴァル・ディ・ノート地域は、1693 年の地震によって大きな被害を受けたため、ラグーザやノートなどは都市がまるごと新たに再建されたほどであった。すなわち、この地方にルネサンス以前の建築は少ししか残されてはいないものの、モディカのサンタ・マリア・ディ・ベトレム聖堂コンフラーティ礼拝堂と、コミーゾのサン・フランチェスコ聖堂ナセッリ礼拝堂（図 4）は、スクインチによるドームで覆われた 16 世紀前半の建築として注目に値する。ブルネレスキによるサン・ロレンツォ聖堂旧聖具室以降、正方形平面にドームを架けるときには、ペンデンティヴが主流となったが、これらの礼拝堂では地元中世の伝統が引き継がれていると考えられ、ことにコミーゾではゴシック風のリブも使用されている。この地方では中世建築が稀少であるため、中世からルネサンスへの変遷を辿るうえでも、きわめて興味深い存在である。

図 4　ナセッリ礼拝堂、サン・フランチェスコ聖堂、コミーゾ

（3）むすびにかえて

南イタリアの建築には、当時南イタリアを支配していたスペインの影響をも考慮に入れなければならない。本研究では、スペイン（イベリア半島）の建築を十分に調査することはできなかったものの、16 世紀半ばに改築されたトマールのクリスト修道院回廊には、ローマの盛期ルネサンス建築との類似性がうかがわれる。この場合には、当時のヨーロッパ各国に知られていたセルリオの建築書を参照したと考えられるが、このことはパラッツォの立面構成などにも広く当てはまると思われる。すなわち、南イタリアとイベリア半島のあいだの文化交流については、一方的というよりも相互的なものであったと推測できるので、今後は時代の変遷や地域ごとのちがいについても勘案しながら、両者の関係について検討してゆきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

① 飛ヶ谷潤一郎、アルベルティの『建築論』における「スパティウム」の用法、空間史学叢書、査読有、1 巻、2013、141－157

〔学会発表〕（計　3　件）

① 飛ヶ谷潤一郎、セルリオの建築書『第四書』のヴェネツィア風パラッツォ（cc. 34v, 35r）について、日本建築学会大会、2015 年 9 月 6 日、東海大学（神奈川・平塚市）

② 飛ヶ谷潤一郎、セルリオの建築書『第四書』の集中式聖堂（cc. 57v, 58r）について、日本建築学会大会、2014 年 9 月 14 日、神戸大学（兵庫県・神戸市）

③ 飛ヶ谷潤一郎、トマールのクリスト修道院大回廊立面とその性格について、日本建築学会大会、2013 年 9 月 1 日、北海道大学（北海道・札幌市）

〔図書〕（計　4　件）

① 飛ヶ谷潤一郎他責任編集、ミケランジェロ展、展覧会カタログ、山梨、東京、広島、2016、244

② 飛ヶ谷潤一郎翻訳・解題「フラ・ジョコンド」「アントニオ・ダ・サンガッロ・イル・ジョーヴァネ」「バッチョ・ダーニョロ」、ジョルジョ・ヴァザーリ、美術家列伝、森田義之他 4 名監修、第 4 巻、中央公論美術出版、2016、19－79、89－100、167－190

③ 飛ヶ谷潤一郎、祝福のロッジアの形態の変遷について、加藤磨珠枝編、ヨーロッ

パ中世美術論集 1：教皇庁の美術、竹林舎、2015、355－376

④ 飛ヶ谷潤一郎翻訳・解題「ブラマンテ」「ジュリアーノ・ダ・サンガッロとアントニオ・ダ・サンガッロ」「クローナカ」「バルダッサーレ・ペルッツィ」、ジョルジョ・ヴァザーリ、美術家列伝、森田義之他 4 名監修、第 3 巻、中央公論美術出版、2015、83－96、139－156、219－230、311－327

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
飛ヶ谷　潤一郎（HIGAYA, Junichiro）
東北大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：30502744

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：